

## ベルクソンにおける「笑い」の二つの特徴

川里卓 (名古屋大学)

本論文の目的は、ベルクソン(1859-1941)の『笑い』における「笑い」(Rire)を、『意識に直接与えられているものについての試論』(以下『試論』)における「自由な行為」が持つ特徴から解釈し、「笑い」が持つ二つの特徴を明らかにすることである。

ベルクソンは『笑い』第二十三版の序文の冒頭で、「この本は『笑い』について(あるいはむしろ、特に喜劇的なものによって喚起された笑いについて)の三つの論考を含んでいる」<sup>(1)</sup>(Rire, 383)と述べている。『笑い』において、ベルクソンは笑い一般を問題にするとともに、その中で特に喜劇的なものに関わる笑いを扱うと明言する。喜劇的なものとは、例えばモリエールなどの喜劇のことである。ベルクソンにおける笑いの理論では、「機械的こわばり」(raideur mécanique)と「生命」(vie)が対比される。生命の本質は流動的なものであるが、前者は生命の流動性が固定化した側面であるとベルクソンは言う。笑いとは、この「機械的こわばり」を取り除き、私たちを生命が持つ柔軟性や流動性の中へ戻す働きのことである。

また、ベルクソンは「笑い」が社会的な機能を持つものであるとする。「笑いとは、ある種の社会的身振りである。笑いは、人々や出来事におけるある特定の放心を強調し、抑えるものなのである」(Rire, 428)。「笑い」は、生命の柔軟性をもってすれば回避できる障害に対して、それを避けられないという、精神や身体の不自然な動作が見られることを意味する。「機械的こわばり」は社会の潤滑な流れを阻害する可能性がある。従って、社会的な活動を柔軟に行うために、笑いによってこの障害を取り除いておく必要がある。つまり、「機械的こわばり」に由来する滑稽さや不自然さに対する笑いは、ある意味では「嘲笑」となり、その意味で社会的な「懲

罰」(châtiment)ともなりうるとベルクソンは考える。このように、「笑い」は社会的機能を持ちうるのである。

フレデリック・ワームズは『アンリ・ベルクソン』の「笑い」の章において、『笑い』と『道徳と宗教の二源泉』の議論には、明確な「持続」(durée)の概念が欠如していると述べている<sup>(2)</sup>。ベルクソンの「持続」とは、諸々の諸瞬間が互いに分離することなく、相互に浸透した状態を示す概念であり、固定化した状態とは全く異なる、流動性や柔軟性をその本質とするものである。この「持続」という概念は、『笑い』において至る所に見出せるとワームズは考える。すなわち、『笑い』においては、しかしながら、持続は偏在的である。というのは、まさしく、私たちが笑うのは、次のような場合だからである。それは、私たちが誰かを空間的メカニズムに帰する時であり、私たちがその人の深い持続を忘れる時であり、私たちが彼のうちに主体性をもはや見ない時である<sup>(3)</sup>。ある人が障害物を前にして柔軟な行動を行い、その障害を避けるならば、そこにはその人の柔軟で固定化を退ける「持続」の働きを見ることが出来る。このように、ワームズは、『笑い』における「持続」の存在について言及している。ただ、そのことが述べられる『アンリ・ベルクソン』においては、『試論』と『笑い』の関連についてこれ以上深く追及されていない。そこで、本論文では、『試論』と『笑い』の具体的な内容を取り上げ、この議論を詳しく検証するとともに、「持続」あるいは「生命」という観点から「笑い」を解釈してみたい。つまり、それは、「笑い」を「懲罰」とは別の角度から捉え、「笑い」に別の意義を探る試みである。すなわち、「笑い」を「生命」の能動的で主体的な現れとして捉える試みである。

そのためには、『試論』における「自由」の議論が参考になるだろう。というのは、『笑い』と『試論』には、表面における「こわばり」と生命や持続の柔軟性という対比が共通に見られるからである。社会生活では人々に共通の表面的な要素が問題となる。しかし、個々人の精神の奥にある柔軟で生き生きした「わたし」は、そのような社会生活で固定化した「こわばり」を破壊し、表面に現れる機会を探し

ている。ベルクソンにおける「自由な行為」とは、このような「わたし」の全体が行動のうちに表現されることをいう。ここには、「わたし」の主体的で能動的な働きが見られる。一方で、『笑い』の議論では、「笑い」の社会的な「懲罰」という、人間の側から見た観点が強調されており、諸々の「こわばり」に能動的に介入する「生命」の働きの特徴が述べられていない。そこで、「自由」と「笑い」の共通性を示すことが出来るならば、「笑い」を「自由」が持つ特徴から解釈することが可能となるであろう。そのような「笑い」とは、「生命」の能動的で主体的な現れという観点から見た「笑い」であり、社会的な関係の中で生じる「こわばり」に能動的に入り込み、それぞれ異なった状況における「こわばり」を矯正し、人々を再び全体性の中へ返らせる「生命」の働きとしての「笑い」である。ベルクソンは「笑い」を「懲罰」という意味で捉えているが、「笑い」には、生命が様々な状況に主体的に入り込み、問題を解決していく側面がある。それを本論で明らかにする。

## 1 社会的「懲罰」としての「笑い」

本章では、なぜ「笑い」(rire)が生じるのか、という問いに対するベルクソンの考察を、『笑い』の第一章を取り上げ検討する。

ベルクソンは「笑い」が三つの特徴を持つと考える。まず、ベルクソンは笑いが「人間的」なものであると考える。笑いが人間的であるというのは、人が何かを笑う時、人はそこに何等かの人間的なものを見取っているということである。「人間的なもの」とは、例えば、「人間的な態度」や「人間的な表情」である。そこで笑われているものが、例えば動物の表情であるなら、その動物の表情の中に、人間の精神にとってのおかしさが見出されている。二点目の特徴は、笑いが精神の「無感動」(insensibilité)を伴うことである。笑いは、純粋な知性の産物であるとベルクソンは考える。「笑いは、感情と相いれないものである」(Rire, 453)。精神から感情的要素を取り除くと、知的な働きが残る。笑いとは、このような知的な働きである。

三点目は、社会的機能を持つものとしての「笑い」である。最後の特徴については、以上の二点より詳しい議論をベルクソンは行っている。本章では、この三点目の特徴について詳しく検討してみよう。ベルクソンは「笑い」について次のように述べている。

笑いを理解するためには、笑いを社会という本性的な環境の中に置く必要がある。特に、社会的な機能という、笑いの有用な機能を明確にする必要がある。(Rire, 390)

例えば、グループの人たちの間で共有される笑いがある。その場合、笑いはその集団(社会)の中での共通の認識である。一方で、その外部にいる人たちにとっては、その人たちが笑っている理由が面白いと思われない場合がある。そこでは、笑いはそのグループの中だけでの共通の認識となっているからである。例えば、電車の中である集団が笑っている。しかし、自分はそのグループに属していないので、面白いとは思わない。笑いは、そのグループの中で共有された認識である。一方で、この笑いが生じている集団の人数をさらに増やして、それを社会全体にまで拡張すれば、その笑いは社会の成員全体に共有された笑いとなる。笑いを社会の中に置き、どのような機能を持つか考察すると、そこには社会的な「懲罰」(châtiment)という意味が見出されるとベルクソンは考える。ベルクソンが用いる、笑いが起こる例を二つ挙げてみよう。一つ目は、歩いている人が、石に躓いて転ぶ場合である。二つ目は、いたずらが仕掛けてあった椅子に人が座り、椅子が壊れて尻餅をつく、という例である。二つの例には、前者は周りの人が生じた出来事を「観察」しているだけなのに対して、後者は周囲の人がその人を「試す」ことをしているという違いがある。しかし、両者に共通するものとして、目の前に現れる障害を避けられないという、「こわばり」(raideur)が見出される。自分の外部に障害物が現れたときに、柔軟性に富む精神や身体なら避けることができるはずである。しかし、これら二つ

の例においては、身体あるいは精神の柔軟性が欠如し、障害物を避けることが出来ていない。その時の「笑い」は、転んだ人が障害を避けられないという順応性の欠如に対して生じている。

以上の例は、障害物が笑われる人の外部にあり、それを避けられなかった場合である。これ以外に、笑いが生じる場合には、内面的な要因があるとベルクソンは考える。道に落ちているバナナの皮などの外的な障害物に対応する、精神の内面における障害は「放心」(distraction)である。例えば、ドン・キホーテをベルクソンは取り上げる。ドン・キホーテは、現実のあらゆるものを、自身が読んだ騎士道物語だと思って行動する。その結果、彼の行動はことごとく放心的なものとなる。例えば、井戸に落ちるということでも、ドン・キホーテが井戸に落ちる場合、それはよそ見によって生じたものではない。星を目指して、水に映る星を目がけて井戸に飛び込むのである<sup>(4)</sup>。前者は単に注意が不足しているだけだが、後者の場合には、現実離れした放心的な要素が見受けられる。その結果、そこに笑いが起こるとベルクソンは分析する。

社会の成員は、精神と身体を、様々な状況が要求することに適応できるようにする必要がある。笑いは、その人が現在の状況に適切に適応できていないというサインである。笑いに多少とも非難の意味が込められているのは、そのためである。笑いによって社会は、その人の「機械的こわばり」を取り除こうとする。ベルクソンは可変性を欠いた行動を、「自動機械」(automatisme)と呼ぶ。笑いは「生体の上に機械的なものが刻まれた」(Rire, 405)ために生じるのである。ここでは生体が生命的なものとして、機械性に対立するものとして描かれている。

以上の考察から、笑いが生じる時には、現実の状況に対する不適応が生じており、この不適応は社会にとっての不安要素とも成り得ることから、「懲罰」によって取り除こうとする考えが働いていることが理解できる。これがベルクソンにおける笑いの存在理由である。社会は、私たちに、常に変化する現実への適応を要求している。そして、これは同時に生命が要求することでもある。

社会と生命が私たちの各々に要求するものは、現在の状況の輪郭を見分ける、絶えず目覚めた注意や、私たちが現在の状況に適応できるための、身体と精神のある種の可変性でもある。緊張と可変性、これらは生命が機能させる、互いに補う二つの力である (Rire, 395)

「社会」と並んで、「生命」(la vie)という言葉が用いられている。社会と同様、生命も私たちに現実の状況に適切に対応する目覚めた意識と、柔軟に変化する精神を要求する。ベルクソンは、「機械的こわばり」と「生命」を対比して、「笑い」を捉える。「柔らかなもの、絶えず変化するもの、生きているものに対するこわばりや出来合いのものや機械的なもの、注意に対する放心、つまり自由な行為に対する自動性こそが、笑いが強調し、強制しようとするものである」(Rire, 449)。生命の柔軟性が、生体に生じた固定した側面を、笑いによって解消しようとする。この生命が持つ柔軟性は、社会的な活動の中に入り込み、個々人の「こわばり」を取り除き、社会を円滑に機能させようとする。笑いには、このような社会的な働きが含まれているのである。

## 2 「笑い」と「自由」

前章では、社会的機能という観点から、ベルクソンが「笑い」を考察していることについて論じた。本章では、「笑い」を『試論』における「自由」が持つ観点から考察し、「笑い」が持つ「懲罰」とは異なる特徴を明らかにすることにしたい。

さて、カントも「笑い」を定義している。しかし、それはベルクソンの「笑い」の理論とは異なる視点からである。カントは『判断力批判』で次のように述べている。

笑いとは、緊張した期待がとつぜん無に転化することから生じる激情である。この転化が悟性にとって喜ぶべきものでないことはたしかであるとはいえ、ほかならぬその転化が間接的に一瞬だけきわめて生き生きとした喜びを生む(KU, 229, 『判断力批判』熊野純彦訳、320 頁)

カントにとっての「笑い」とは、緊張した状態が解放されることから起こる情動のことである。この緊張状態が無に帰する時に、同時に「生き生きとした喜び」が生じるとカントは考える。このような一つの個体の内部における「喜び」という観点から解釈された「笑い」は、『試論』における「自由」と繋がる側面がある。というのは、ベルクソンは「自由」を、個々人の精神の奥にある生き生きとした力が表面に現れるものとして考察しているからである。そこには社会化され柔軟性を失った「表面的なわたし」を破壊しに来る、意識の内奥にある柔軟性の現れを見出すことが出来る。本章では、このような能動的で主体的な活動をする「自由」が持つ特徴を、ベルクソンの「笑い」に議論に応用する試みを行う。結論として、「笑い」が諸々の状況の「こわばり」へ能動的に介入する、生命の主体的な現れであることが明らかになるだろう。そのために、本章ではまず「持続」(durée)の定義を確認する。そしてそれが、ベルクソンが考える意識の構造である「二つのわたし」における「深いわたし」、つまり精神の深部に位置することを明らかにし、「自由な行為」とは意識の深奥にある領域が、行動や振る舞いへと具体化することを検証する。最後に上記の考察を「笑い」の議論へ応用してみたい。

## 2.1 「持続」における二つの特徴

本節では、『試論』の第二章で論じられる「持続」(durée)について検討する。まず、ベルクソンが考える「持続」の定義を確認しよう。ベルクソンは次のように述べている。

実際、少し先で述べるように、持続について二つの可能的概念がある。一つはあらゆる混合物から純粋である持続であり、もう一つは、こっそりと空間の観念が介入している持続である。全く純粋な持続とは、私たちのわたしが生きるままとなり、現在の状態と以前の状態の間に区別を設けることをしない時に、私たちの意識の継起がとる形式のことである(DI, 67)

これが「持続」の定義である。持続に関してベルクソンは二つの点を区別している。それは、前と今の瞬間の間に区別が生じない純粋な持続と、持続の中に空間の観念が入り込んだ、空間化された持続である。ベルクソンが挙げる持続の例として、部屋の中から教会の鐘の音が聞こえる場合がある。読書に集中している時、外で教会の鐘が鳴っていることに気が付いたとする。三回、四回と鐘が鳴るにつれて、私たちは実際に運動している鐘を頭の中でイメージする。この時、鐘の音という聴覚的な連続的な音は、教会で鳴っている鐘という空間的なイメージに変換される。一方で、読書に集中していた時、意識されない状態であっても、私たちは鐘の鳴る音を無意識的に感じていた。なぜなら、注意が鐘の音に向いた時、それまで無意識的に捉えていた鐘の音の鳴った回数を数えることが出来るからである。私たちの意識は、鐘の音を無意識的に把握していたのである。しかし、私たちが無意識的に鐘の音を認識していた時、それぞれの鐘の音は互いに分離した形で存在したわけではない。それぞれの鐘の音は連続した一つの音楽のように感じられていた。私たちの精神は、鐘の音を継起的に把握していたのである。このように連続的に捉えられた鐘の音が「持続」の例である。

鐘の音がそれぞれの音に分解されるのは、反省的で思弁的な意識が行うものである。それは持続を捉える意識とは異なる精神の働きである。鐘の音が数えられるとき、それは空間的に把握される。私たちがものを数えるとき、それぞれの数が数直線上に配置されるように、それぞれの鐘の音は数直線上で空間的に認識される。時間の流れが空間的イメージに変換され、数直線のようなものに変化するのである。



数直線の上では、全てのメモリを一度に認識することが可能である。空間的認識は同時的な認識だからである。そこには時間の流れが存在していない。このような空間化された状態は、行動や意識的な操作に適した状態である。例えば、私がどこかに出かける場合、町の地図を頭の中で思い描く。どの道を通って目的地に行くのかを考える。このとき私は行動を頭の中で操作している。空間的な把握は、行動に適した状態である。私たちの意識状態には、このような空間的な認識と、それぞれの瞬間が互いに融合した持続的な認識の二つの形態が存在する。このような「空間化」された状態と、諸々の継起する瞬間が互いに浸透する状態という、「持続」に見られる二つの特徴は、次に論じる「二つのわたし」においても見出せる構造である。従って、次に「二つのわたし」について検討することにした。

## 2.2 二つのわたし

ベルクソンによれば、私たちの心は、大きく二つの領域から成り立っているという。それは「表面的なわたし」と「深いわたし」である。「持続」に空間化された状態と、諸々の瞬間を継起的に把握する「持続」という二つの特徴があるように、「わたし」にも空間化あるいは言語化された「わたし」と、様々な経験を互いに浸透させた「わたし」がある。前者の「表面的なわたし」とは、互いにはっきりと分離された心理状態から成り立つ「わたし」である。互いにはっきりと分離された心理状態とは、明確に言語化された心理状態のことを指す。つまり、言葉によって取り出された明確な輪郭を持つ心理状態のことである。この心理状態は、他者に伝達することが出来るものである。というのは、言語は全ての人々に共通する側面を伝達するからである。私の精神に固有の心理状態は、そのままでは他者にそのニュアンスを伝達することが出来ない。しかし、全ての人が共通して理解する言語の意味に自分の心理状態を還元することで、つまりニュアンスを捨象することで、言語的コミュニケーションが可能になる。心理状態が明確な形を取ることや、言語化に適した状態になることで、社会的生活が円滑に行うことが出来るようになる。このよ

うな意識状態が、精神の表面的な部分、つまり他者との社会生活が可能になる側面を形成している。この意味において、この心理状態は「表面的なわたし」と呼ばれる。

一方で、「深いわたし」とは、深い反省によって到達する、意識の深い状態における「わたし」のことである。精神の深い部分においては、諸々の心理状態は、互いに浸透し合う状態を取っている。「諸々の心理状態」とは、私の過去における様々な経験のことである。例えば、私が一か月前に山に散策に行ったという経験や、三か月前には別の山に登ったという過去の経験である。過去の経験においては、それぞれに私の心理状態が伴っている。現在の私の心理状態は、このような過去の経験が蓄積されて形成されている。例えば、私がこれから登山に行くとしたら、それは過去の諸々の登山の経験を踏まえた体験となるだろう。それは初めて山登りに行くときの体験とは、明らかに異なったものである。私の意識は現在この瞬間に位置するに過ぎないが、そこには過去の諸経験が同時に存在している。過去の経験は、現在の私の精神の中で生きている。現在の私の精神は、過去の経験と切り離して考えることが出来ないのである。このような、過去が現在の瞬間の中に継起している状態がベルクソンのいう「持続」である。「深いわたし」は、諸々の経験が互いに浸透する「持続」した状態から成り立っている。ここには、社会的なものに還元することが出来ない私の心理に固有なニュアンスがある。しかし、社会生活を行う中では、このような各人に固有の心理状態が前面に出てくることは稀である。ベルクソンが考える「自由」とは、各人の意識の深奥にあるこのような「深いわたし」が、社会のなかで固定化し、柔軟性を失った「表面的なわたし」を破壊し、表に現れることである。私の精神の深部に位置する、私に固有なニュアンスを持った心理状態が自由を獲得するのである。本章では最後にその点を考察し、『笑い』と『試論』の議論の共通性を検討することにしよう。

## 2.3 自由な行為

本節では、前節で考察した「二つのわたし」の考察をもとに、『試論』における「自由」の問題を検討し、ベルクソンが考える「自由」が有する特徴から「笑い」を解釈してみたい。

ベルクソンが考える「自由」とは、一般的に考えられるような、多くの選択肢の中から選択する意味での自由ではない。ベルクソンが考える「自由」とは、人格の全体が一つの行動のうちに現れるような行為のうちに存在している。ベルクソンは「自由な行為」を次のように定義する。

この内的状態の外的な表現が、まさに自由な行為と呼ばれるものである。というのは、ただ私だけが自由な行為を行うものだからであり、内的状態の外的な表現は、私の全体を表現するからである(DI, 109)

ベルクソンにおける「自由な行為」について、ワームズはそこに二つの特徴が見られるという。それはまず、「自由な行為は、内容の全体性あるいは私に固有な歴史を表現する」(DS, 75)というテーゼであり、他方は「自由な行為は、それによってわたしそのものが生産される一つの力、あるいは『生き生きした活動』を感じさせる」(DS, 75)というテーゼである。第一のテーゼは、ベルクソンにおける「自由な行為」が、「私の全体」が外部に行動として表現されることについて述べている。私たちは日常、他者との社会的な関係の中で生活している。一方で、私たちはこのような社会的な側面には還元されない心の部分を持っている。それは例えば、シェイクスピアの『ハムレット』におけるハムレットの行動や、モリエールの『人間嫌い』におけるアルセストの怒りなどに表現されるような、精神の全体的な側面のことである。ベルクソンは言う。「私たち一人一人は、愛したり憎んだりする、各人それぞれの方法を持つのであり、この愛、憎しみは、人格の全体を反映する」(DI, 108)。このような心理的な側面が私たちには見られる。ハムレットやアルセストの

行動は、まさに彼らの全人格が表現されたものであり、彼らの振る舞いは、精神の全体的で質的な側面を示す好例である。このような全人格を反映する特徴が、行動や振る舞いの中に現れることが、ベルクソンが考える「自由な行為」である。

ワームズの第二のテーゼで強調されることは、「自由な行為」における「わたし」の能動的で主体的な働きである。私たちが自由に行動する場合には、「奥底にあるわたしが、表面へと上昇してくる。外的な殻が、抗しがたい圧力に負けて砕ける」(DI, 112)ことが生じる。内的な心理状態が外部に表現される際には、社会化され、各人に固有のニュアンスを失った「表面的なわたし」が打ち砕かれ、「理由なく」行為が遂行される。「理由なく」行動が行われるというのは、人格の全体がそこに現れるような行為は、単純な一つの理由によって表現されないからである。私たちの意識の深い部分では、一つの心理状態が明確な形を取っているのではなく、過去に経験した無数の心理状態が互いに浸透し合いながら、一つの全体的な心理状態を作り出している。従って、ある「自由」な行動は、一つの明確な理由から説明されることはない。それはまさに質の問題であり、明確な「一つの理由」からの解釈が不可能である。自由な行為とは、精神の深くにある能動的で主体的な力が活動することであり、ベルクソン自身はこの力を「わたしの生き生きした活動」(*l'activité vivante du moi*)(DI, 117)と表現している。自由な行為は、社会生活の中で固定した、精神の内部にある「こわばり」を破壊しに来る、私の内部に宿る「生き生きした活動」によって遂行される。

ワームズは「自由な行為」の特徴について、「わたしの全体」が行動として現れる側面と、「わたしの生き生きした活動」の現れという二つを考えている。前者は「わたし」の生の全体性を表現し、後者はその能動的で主体的な働きを強調するものである。このように、「自由な行為」の議論には、精神の表面において社会化し固定化した「こわばり」を破壊しに来る、精神の深い部分の全体的で能動的な働きがある。これと同様に、「笑い」の議論には、「こわばり」と「生命」の柔軟性という対比が存在することを前章で確認した。しかし、「笑い」の議論においては、「自

由な行為」のような柔軟で生き生きした生命の活動が強調されていない。つまり、諸々の場面で生じる「こわばり」に「笑い」が能動的かつ柔軟に介入する、生命の柔軟で主体的な働きが協調されていないのである。「自由」と「笑い」は、「こわばり」という固定化したものと、「持続」や「生命」の柔軟で全体的な特徴という対比を想定している。この意味において、両者は類似した概念を提示しているのであるから、ベルクソンにおける「笑い」は、「自由」が持つ特徴である、能動的で主体的な特徴から解釈することが可能であろう。その「笑い」は、諸々の関係の中で生じる様々な状況(こわばり)に可変的に介入し、多様な状況に柔軟に適応しながら問題を解決する、柔軟性に富んだ創造的な特徴を持つような「笑い」である。ベルクソンにおける「笑い」には、嘲笑として機能する社会的「懲罰」という特徴以外にも、「生命」が諸々の状況の「こわばり」に主体的かつ能動的に参与するもう一つの特徴が見出せるのである。

### 3 結論

本論文では、まずベルクソンにおける「笑い」を考察し、そこには社会的「懲罰」という働きがあることを示した。現実の状況に柔軟に対応しなければいけない場面で、身体あるいは精神に「機械的こわばり」が存在し、目の前の障害を上手く回避できない場合に、「笑い」は生じる。自身の外部に現れる障害を避けられないという身体や精神の「こわばり」は、人を躓かせ、その部分にその人をとどまらせる働きをする。そこには柔軟で可変的な生命の働きが見られない。というのは、その障害物を柔軟に避けることができるなら、その人はその部分で躓くことなく、前進することが出来たからである。しかし、「こわばり」が生じる場面において「笑い」が生じることで、部分で滞った「こわばり」は解消され、その人は再び生命の柔軟性や全体性の中へ返ることができる。

『試論』における「自由」とは、ある人の全人格が、一つの行動の中に表現され

ることである。「自由な行為」においては、「わたしの生き生きした活動」という、私の内部に宿る全体的な「力」の能動的な働きが見られる。例えば、ハムレットやアルセストの行動には、ハムレットらしさや、アルセストの性格が十分に表れている。意識表面においては、それぞれの心理状態は明確な形を取る一方で、意識の深層では、諸々の心理状態は互いに浸透し、一つの心理状態のニュアンスを作り出している。意識の深層における私たちの心理状態は、決して言語に還元できるものではない。『試論』における「自由な行為」の議論には、意識表面の固定的なものと、「深いわたし」における「持続」の能動的な働きという対比が見られる。これは「笑い」における「こわばり」と「生命」の対比という議論と共通の特徴を持っている。ただ、「自由」の議論では、私たちに精神の深部に横たわる柔軟性の、主体的で能動的な働きが見られるのに対して、「笑い」の議論においては「生命」のそのような主体的な働きが強調されていない。「生命」の観点から見た「笑い」とは、「生命」が社会や個々人の関係の中で生じた「こわばり」に能動的かつ柔軟に介入し、そこでの「こわばり」を解消しながら、社会の流れを円滑にする創造的な働きのことである。ベルクソンが、「笑い」が社会的な「懲罰」となりうると考えるのは、「笑い」を知性的で社会的な観点から捉えたからであり、これは確かに「笑い」の一つの特徴を示すものである。ただ、「笑い」はより多様な解釈を受け入れることが可能な概念である。というのは、「笑い」は「懲罰」という観点から見れば知性的なものとして現れるのであるが、同時に「生命」の能動的で主体的な特徴から「笑い」を解釈することも可能だからである。そのような「笑い」とは、生活の諸場面における「こわばり」を解消しながら、人々を全体的な生のなかへ戻すような「笑い」である。「笑い」にはこのような能動的な側面が見られる。本論文ではベルクソンの「笑い」におけるこれら二つの特徴を示したのである。

## 略語表・注

[DI] = Bergson. H, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, in *Œuvres*, Paris, Presses Universitaires de France, 1970, pp.1-157.

[DS] = *Bergson ou les deux sens de la vie*

[Rire] = *Le Rire* in *Œuvres*, pp.381-485.

[KU] = *Kritik der Urteilskraft*

(1) 本稿の引用は、竹内訳『意識に直接与えられたものについての試論』および林訳『笑い』を参考に作成した私訳である。

(2) Frédéric Worms, *Henri Bergson* (CD4), chapitre 13, 1:18-1:20 秒。

(3) *ibid*, 1:31-45 秒。

(4) 『ドン・キホーテ』には、これに対応する箇所を見つけることが出来なかった。

従って参考までに、ベルクソンのフランス語を引用する。

Sans doute une chute est toujours une chute, mais autre chose est de se laisser choir dans un puits parce qu'on regardait n'importe où ailleurs, autre chose y tomber parce qu'on visait une étoile. C'est bien une étoile que Don Quichotte contemplait. (Rire, 393)

## 参考文献・資料

Henri Bergson, *Œuvres*, Paris, Presses Universitaires de France, 1970.

Frédéric Worms, *Bergson ou les deux sens de la vie*, Paris, Presses Universitaires de France, 2013.

Frédéric Worms, *Henri Bergson* (CD), Paris, Presses Universitaires de France, 2013.

Immanuel Kant, *Kritik der Urteilskraft*, Felix Meiner Verlag, 2009. (『判断力批判』熊

野純彦訳、作品社、二〇一五年。)

アンリ・ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』竹内信夫訳、白水社、二〇一〇年。

アンリ・ベルクソン『笑い』林達夫訳、岩波書店、一九三八年。